

## 軽度要介護高齢者における参加の特徴

—主観的参加に着目した本人・家族へのインタビュー調査より—

○ 日本福祉大学 太田 健一 (009406)

キーワード：要介護高齢者，主観的参加，インタビュー

### 1. 研究目的

高齢者福祉の分野で使用される「参加」または、「社会参加」（以下、参加）という用語は、地域コミュニティへの参加や、家事等を通じた役割を持つこと等がイメージされ<sup>1,2)</sup>、高齢者の幸福感に良い影響を及ぼすとされている<sup>3)</sup>。一方で、身体・認知機能が低下した要介護高齢者にとって参加は難度が高く、機会が減少すると推測される。

ここで参加の概念に着目すると、地域コミュニティへの参加や家事の遂行度といった客観的参加のほか、自律的で自身の価値観に合った生活・人生を送っているかという主観的参加がある<sup>4)</sup>。これは、自分の生活・人生に参加するという権利ベースの概念であり、要介護高齢者においても参加は守られるべき権利であることが分かる。このような背景から、国外では近年、クライアントの経験的側面に着目し、インタビュー調査を通して参加の概念を検討する研究が増えている<sup>5)</sup>。一方で、国内で同様の視点に立った研究は限られている。参加は文化や制度等の影響を受けるため、国外の先行研究を応用するには限界がある。

以上より本研究では、国内の軽度要介護高齢者における参加の特徴を明らかにすることを目的としたインタビュー調査を実施した。本研究を通して、専門職のアセスメントの視点が広がり、軽度要介護高齢者の幸福感の維持・向上に向けた支援の拡大が期待できる。

### 2. 研究の視点および方法

対象は、自宅で生活をする軽度要介護高齢者（要介護2）とその家族4組である。担当する介護支援専門員から候補となる対象者に研究の趣旨を説明した。内諾を得た4組に対して、研究代表者が自宅に訪問し、再度研究の趣旨を説明して同意を得たうえで、インタビュー調査を行った。担当する介護支援専門員も同席し、軽度要介護高齢者へのインタビューを主に、それを補足する形で家族へのインタビューを行った。インタビューの内容は、①日常生活の状況、②様々な場面における自己決定、満足感、価値観、重要性とした。

分析は、録音した音声データの逐語録から参加にあたるセグメントを抽出し、それに対してオープンコードを作成後、さらに抽象度の高いカテゴリーを生成していった。次に、生成されたカテゴリーを主観的参加、主観的・客観的参加、客観的参加に分類した。分析に伴い、主観的参加に着目して参加を分類した Dijkers ら<sup>4)</sup>の先行研究を参考にした。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、日本福祉大学倫理審査委員会にて承認を得るとともに（承認日：2022年7月19日、承認番号：22-011-02）、日本社会福祉士学会の研究倫理規定を遵守した。また、対象者となる要介護高齢者と家族及び、担当する介護支援専門員には研究趣旨、研究への参加は任意であること、個人情報等の管理等について、書面と口頭にて説明し、書面で同意を得た。本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

### 4. 研究結果

軽度要介護高齢者の参加の特徴として、主観的参加では、「自律的な生活」、「満足感のある生活」が挙げられた。主観的・客観的参加では、「テレビ鑑賞」、「自由な買い物」、「親族との交流」、「介護保険サービスの利用」、「食事の楽しみ」、「健康への関心」、「役割を持つ」、「家族の助けがある生活」、「仕事への意欲」が挙げられた。客観的参加では、「家事」、「信仰活動」が挙げられた。また、具体例として、「自由にしています。自由だから満足しています。テレビ見て。自由に寝っ転がって見て。」「食べたいときに好きなものを食べたら満足だなあと。甘いものだって辛いものだって、自分の口に合った。食べてみようかなと思って食べて、口に合ったらそれでいいんだ。」といったように、「テレビ鑑賞」、「食事の楽しみ」をはじめ、多くのカテゴリーが「自律的な生活」を前提に成り立っており、それが「満足感のある生活」に繋がっていた。また、「家族の助けがある生活」や「健康への関心」は「自律的な生活」を支えていた。

### 5. 考察

主観的・客観的参加及び、客観的参加の「親族との交流」、「健康への関心」、「役割を持つ」、「家事」、「信仰活動」は、国際生活機能分類（ICF）をはじめ、国内でも代表的な参加の分類や尺度に含まれる項目である。一方で、主観的参加の「自律的な生活」、「満足感のある生活」や、主観的・客観的参加の「テレビ鑑賞」、「自由な買い物」、「食事の楽しみ」、「家族の助けがある生活」、「仕事への意欲」は、主観的参加に着目したインタビュー調査を行ったことで挙げられた参加項目だと考える。軽度要介護高齢者は、一般高齢者のような地域コミュニティへの参加等は難しい。一方で、自律的な生活を前提に可能な範囲の活動を行うことで、満足感のある生活を送るという参加の特徴があると捉えられた。本研究の限界として、参加は協力家族の有無や地域特性等、環境の影響を受けるため、他の要介護高齢者への一般化には限界がある。

### 文献

- 1) Piškur, B. et al. (2014) Clin Rehabil. 28(3), 211-220.
- 2) Eyssen, I. C. et al. (2011) Arch Phys Med Rehabil. 92(6), 983-997.
- 3) WHO (2002) Active aging. A policy framework, WHO/NMH/NPH/02.8. Geneva, World Health Organization.
- 4) Dijkers, M. P. (2010) Arch Phys Med Rehabil. 91(9), S5-S16.
- 5) Sirén, A. L. (2023) Ageing Int, 21, 1-21.